毎日新聞 コラム「三重～る経済」
掲載日　2022年11月16日(水)
タイトル　男性の育児参画意識
執筆者　百五総合研究所 岩田 芳樹

中高年になると「最近の若い者は…」という言葉が思わず出てしまう。そんな中高年も、自分が若者であった頃には上の世代から同様の愚痴を言われていたはずである。徒然草、枕草子にも同様のフレーズが出てくるそうで、いわゆる「世代間ギャップ」は大昔から脈々と続いているようだ。

２０２０年３月に三重県が発表した「男女共同参画に関する県民意識と生活基礎調査」によると、「男は仕事、女は家庭」という考え方について「同感する」と「どちらかといえば同感する」を合わせた割合は、80歳以上の男性が66.7%に対して、20代男性は17.3%と大きな開きがある。一方、「男性も家事・育児を行うことは当然」の割合は、20代男性で最も高い。男性が家事・育児を行うことに対する意識も世代間で大きく異なることがわかる。

「最近の若い者は…」というフレーズが使われる場合、褒め言葉が続くことは少ないが、こと男女共同参画に関して言えば中高年は若者を見習う必要がありそうだ。

今年４月に施行された改正育児・介護休業法により、育児介護休業が柔軟に取得できるようになった。10月から既存の育休に加えて子の出生後８週間以内に分割して２回取得可能な「産後パパ育休」が創設された。

前述の調査によると、「子育てのための休暇・休業について相談できる職場文化がなかった」が７・０%、「制度利用を認めてもらえなかった」は３・２%などの回答が見られた。回答率としては少数意見とみられるかもしれないが、男性の育休取得に抵抗がある世代の風習が影響しているのかもしれない。

育休取得の選択肢が増えた今回の改正のねらいを理解し、男女の育児に関する「世代間ギャップ」がなくなることを期待したい。